



Title	第1章 アイヌの血筋と次世代への意識
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 31, 21-32
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54987
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_31_04_11.pdf



第1章 アイヌの血筋と次世代への意識

品川ひろみ | 札幌国際大学短期大学部教授

はじめに

本章では伊達市に居住するアイヌの人々の血筋がどのような実態なのかを明らかにする。そのうえでアイヌの人々がその血筋をどのように考え、次の世代に対してどのような考えを持っているのかについてその特徴を見ていく。

はじめに第1節では調査対象者の年齢層や世帯構成および仕事の状況を明らかにする。第2節ではアイヌの血筋とその意識について見ていく。第3節では次世代へのつながりとして、結婚の際にアイヌであることが影響したのか、子どもへアイヌであることをどう伝えたのかについて明らかにする。これらについては対象者の年齢層に着目しながら、アイヌの人々の血筋や意識について見ていく。さらに伊達市の特徴を浮き彫りにするため、これまで行ってきた札幌やむかわ町、新ひだか町などの調査結果と比較する視点を持ちながら分析を進める。

序章でも見たように、伊達市は北海道の歴史において比較的古くからアイヌと和人が生活していた地域である。現在の伊達市の町並みは、かつて仙台藩亘理伊達家の家臣団が集団移住したことを意識した、城下町をイメージした街づくりとなっている。一方でアイヌの人々の歴史については、有珠地区にある善光寺の裏手に、アイヌの伝統的な家屋であるチセやアイヌの慰霊碑が建立されている程度であり、新ひだか町のシャクシャイン像や記念館ほどの規模ではない¹⁾。このような地域において、アイヌの人々の血筋や意識はどのようなものなのだろうか。

第1節 調査対象者の生活

第1項 基本情報

調査対象者は47名のアイヌ民族の方々である。47名の中には9名のアイヌの配偶者を持つ和人と2名の和人養子が含まれている。

対象者の年齢は20歳代から80歳代までと幅広い。20歳代が3名、30歳代が6名、40歳代、50歳代、60歳代がそれぞれ10名、70歳代が7名、80歳代が1名となっている。今後の分析では20歳代～30歳代を青年層、40歳代～50歳代を壮年層、60歳代以降を老年層と分類しその特性を明らかにしていく。先の年齢層をその分類に当てはめると青年層は9名、壮年層は20名、老年層は18名となる。

また対象者の男女比率を見ると、男性15名、女性32名と女性の方が多い。青年層では9名のうち男性が4名、女性が5名と男女の数がほぼ同じだが、壮年層では男性4名、女性16名と女性の比率が高く、老年層では男性7名、女性11名とやはり女性の方が多くなっている。

第2項 世帯構成と生活の状況

2012年現在伊達市の人口は34,745人である。そのうち本調査で該当者がいない大滝区を除いた人口は30,598人であり、その世帯数は14,745世帯である。つまり1世帯当たりの家族数は2.35人ということになる。

では本調査の対象者はどのような家族構成だろうか。青年層を見ると9名のうち5名が既婚者、残りの4名のうち3名が未婚、1名は離別であった。9名のうち同居家族がなく1人で生活しているという人は見られなかった。2人暮らしと3人暮らしがそれぞれ1名、4人暮らしが4名、5人以上が3名であった。

壮年層は13名が既婚者で未婚者は1名、離別が6名であった。世帯構成を見ると1人暮らしは1名のみで、2人暮らしが4名、3人暮らしが6名、4人暮らしが5名、5人以上が3名見られた。老年層はどうだろうか。婚姻状況を見ると既婚者は7名、3名が未婚、離別が3名、死別が5名と高齢であるがゆえか、婚姻の状況も幅が広いといえる。それにともなう世帯の状況も1人暮らしが6名と他の年齢層に比して多い。2人暮らしも5名、3人暮らしが3名、4人暮らしが1名、6人以上が3名と4人以上の世帯構成の者は4名しかおらず、18名中11名が2人以下の世帯構成となっている。

では生活を支える仕事はどうだろうか。青年層9名の中で無職は専業主婦の1名のみで、残りは何らかの職に就いていた。職種の中で目立つのは漁業関係で9名中4名であった。これは本調査が有珠地区という伊達市の中でも漁業者が集住している地域で行われたことが影響していると考えられる。他の職種では介護や看護、建設関係が見られた。

壮年層では無職は4名となっており、すべて女性であった。壮年層は職種が漁業ばかりでなく、看護や介護、調理、配送、農業など多岐にわたっていた。ただし、いわゆるホワイトカラーに分類される職業は2名のみであった。

老年層は18名中12名が無職であった。なかには1人暮らしでありながら無職である者も3名存在しており、生活の大変さがうかがえた。職に就いている人の職種を見ると、漁業関係が2名、土木や建設関係が3名となっており、1名のみが市の嘱託職員といういわばホワイトカラーの職であった。

第2節 アイヌの血筋

第1項 アイヌ民族の血筋

アイヌの血筋について見ていこう。青年層9名はすべての人がアイヌの血筋であった。だが父母の血筋を尋ねると、両親ともにアイヌであると答えた人はおらず、父母のどちらかは和人であると答えた者が7名、父母の一方はアイヌであるがもう一方は不明だとする者が1名、父母のどちらも不明であるとする者が1名だった。

青年層9名のうち6名は結婚しているが、その配偶者について尋ねたところ、配偶者がアイヌであると答えた者は2名、和人である者は3名、不明は1名であった（表1-1）。

表1－1 アイヌの血筋（青年層）

婚姻	本人	父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
未婚	アイヌ	和人・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
未婚	アイヌ	和人・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	不明・不明	和人	和人・和人
離別	アイヌ	不明・アイヌ	不明	不明・不明
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	アイヌ	アイヌ・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	アイヌ	アイヌ・和人
未婚	アイヌ	アイヌ・和人	—	—

壮年層はどうであろうか(表1－2)。壮年層20名のうちアイヌである者は15名、和人が5名であった。本人がアイヌである者の中で父母ともにアイヌである者は5名、父母のどちらかが和人である者は10名であった。父母ともにアイヌである者の配偶者を見ると、配偶者の血筋がアイヌである者は5名のうち1名のみであった。残り4名は和人の血筋である。また配偶者がアイヌという1名も、アイヌの血筋ではあるがその父母は一方が和人の血筋であった。

表1－2 アイヌの血筋（壮年層）

	本人	父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・和人
離別	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ(養)	和人・アイヌ	不明	不明
離別	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
離別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・和人
未婚	アイヌ	アイヌ・和人	—	—
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	不明・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	和人・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ

老年層を確認しよう(表1－3)。老年層18名のうちアイヌである者は14名、残りの4名は和人である。14名のアイヌの血筋のうち父母ともにアイヌである者は、9名と半数以上となっている。また配偶者の血筋を見ると、配偶者がアイヌである者は10名、和人が3名、不明が2名となっていた。10名のアイヌの配偶者の親を見ると、父母ともにアイヌの血筋である者は10名中8名と、やはり青年層と比較して多い。14名のアイヌの血筋の者の中で、父母ともにアイヌであり、配偶者、さらには配偶者の父母もアイヌである者も、5人ほど確認できる。

表1－3 アイヌの血筋（老年層）

婚姻	本人	父母・血筋	配偶者血筋	配偶者父母血筋
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	和人・アイヌ
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	不明・アイヌ	不明（養）	アイヌ・アイヌ
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
死別	アイヌ（養）	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
未婚	アイヌ	和人・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
離別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	不明	不明・不明
未婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	—	—
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
離別	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
死別	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・和人
離別	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
死別	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
未婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	—	—

このように本調査の結果を見ると、これまで行われた調査と同様に、年齢層が高い方がアイヌの血筋が濃く、年齢層が低くなるほどにアイヌの混血が進んでいた。本人がアイヌで、その父母ともにアイヌである者の比率を見ると、青年層は、本人、その父母ともにアイヌである者はいなかった。他の年齢層は、壮年層25.0%、老年層50.0%、平均29.8%であった。

これをこれまでの調査と比較して見ると（表1－4）、老年層については新ひだかとむかわの間くらいの比率であるのに対して、壮年層や青年層において血筋が濃い割合はこれまでの調査の中で最も低い比率であった。

表1－4 地域別アイヌの血筋 単位：%

	青年層	壮年層	老年層	平均
伊達	0.0	25.0	50.0	29.8
新ひだか	22.2	47.8	65.0	45.6
むかわ	13.3	41.2	36.8	31.4
札幌	8.3	38.9	40.0	31.1

第2項 血筋の認識

アイヌの血筋であるという認識はどのようなものだろうか。まず青年層の場合、これまでの調査においても「アイヌ民族である意識」を持つ者は少なかった。本調査においても青年層は同様に「意識すること」が少ない者が多い。「普段はあまり意識しない」とする者がほとんどである。意識する機会があるとすると、アイヌの文化やアイヌ協会の活動に関することによって感じるという程度であった。

2012（平成24）年の新ひだか町の調査では、やはり青年層ではアイヌであることの意識は強くはないものの、アイヌであることを意識するエピソードはそれなりに聞かれた。しかし本調査においては、「いじめられた」といういわばマイナスの経験を含めて、アイヌ民族であることを意識する機会が少ない者が多いという印象があった。

- ・物心ついた時からですね。もう小さい時から。保育所ぐらいかな。わかってました。
- ・周りから言われることが多くて、はい。何か、アイヌがいじめられてて、それでアイヌであることがいじめの対象者なんですよ。だから、自然とアイヌは嫌われるっていうことで、自然とそれで身についてました。
- ・こっち戻ってきて…中略…そういう先生（アイヌの伝承者）になれるんだからって言われたんだけど、ちょっと重荷が、重荷だなと思うし、何かそこまですて、私がアイヌを引き継ぐ…なくても、もう現代人だしなと思ってやめました。
- ・普段ではあまり無いですね。ここに住んでいる以上、地名とか、言葉でふとした時に「あ、そういえば」というのはあります。
- ・普段ではあまり無いですね。
- ・意識すること。普段の生活ではないけど…。何て言うんだろう。ウタリの助成金とかが、受けられることがある時があるから、そういうのは…。そうなんだな、助かるなと思います。
- ・あんまり意識しないです。
- ・あまり気にしたことないから。でも、テレビの番組とかでそういう話になると、ああ、そういうのがあるんだなと思って、そしたら先祖に入っているんだなと思って見ている。
- ・とくにないですね。

壮年層はどうだろうか。壮年層においても「アイヌ民族であることの意識」を持たないという者も見られる。しかし何らかの形でアイヌ民族であることを意識する者は青年層に比べると多い。

「気にしていない」「意識をすることがない」とした者のなかにも、日常生活の中ではアイヌであることを意識しないものの、親戚などの集まりなどではアイヌであることを意識する機会があるという。身体的な特徴など他者に指摘され意識することもあるようだ。

また「どういうふうにアイヌなんだというふうに、強く気持ちを持っていいかが分からないんだよね」と、アイヌであることを、どのように受けとめてよいか戸惑う声も聞かれた。

- ・ありますよ。たとえば、親戚とか集まって話をした時とかに出てくるので、そうかなという認識はありますよ。
- ・普段はないですね。（親戚の集まりとか）そういう時はありますね。イチャルパとか、この辺でやってた時に呼ばれてとかっていう時には、ありますね。
- ・（孫たちが）アイヌの血は受け継いでいるのはいいけれど、永久脱毛させてあげて、外見だけでもきれいにしてあげたいというのが私の一番の願いです。
- ・そうですね。どういうふうにアイヌなんだというふうに、強く気持ちを持っていいかが分からないんだよね。
- ・まあ、ありますね。他の人より毛深いとか。
- ・いやそんなに、なんですかね、ただまあ自分があの血を引いてるんだなっていうくらいで。
- ・ああ、意識…ただ普通に受け入れてますよね。
- ・別にアイヌだろうが、アイヌでないだろうが、関係ないと思ってるから（笑）。
- ・血が半分。だだ、ほら、やっぱり特徴として毛深いとか彫りが深いとかそういうのよね、あったけど。でもそれ以外に別に、なんも気にした事ない。ただの一度も無いかな。
- ・とくに意識はしたことないんですが、周りから言われて、小学生とか中学生、高校の時もそうですが。
- ・ない。アイヌ…自分がアイヌ民族のなんだかつちゅうんでしょ？いやあ、アイヌ民族に関わったことないから。
- ・いやそんなにない、ですね。

老年層ではアイヌ文化、つまり儀式や言葉などにふれることを通して、もう1つはいじめや差別などにあうことによってアイヌであることを感じている。アイヌ文化、儀式や言葉というのは、「儀式とかあったし」や「前の人（母親より年上の）たちはウタリ語を話していました」「ずっとそういう生活をしてきてるしね」など、アイヌとしての生活を通してアイヌだと意識しているという。一方でいじめや差別などの経験からアイヌを意識した例としては、「（子どもの頃に）言葉に対してバカにされた」や、「内地で仕事してた時はね。うん。やっぱり少しは差別された」「貧困な時だね、やっぱりね。貧乏だつちゅう事は、アイヌは幸せになれない」「あるよ。人にちょっと下げられた時に」

など、困難な経験がアイヌとして意識することだとしている。またそれらの経験を持たない人たちは、むしろアイヌとして意識することが「ない」としている。

- ・そういうのも無いですね。無いですね。無いけども、周りがね、周りが結構いるから。「あ、そうなんだな」って自分でわかっただけで。
- ・今のところ何もない。子どもの頃はね。それこそ、アイヌと呼ばれて。私はきかない方だったから歩いて。小学校の頃はね、気にもしてなかったから、言葉に対してバカにされたけど。でも、そんなにひどくはなかったからね。私はきかなかったから追っかけて、家まで行って怒鳴り込んだようなもんだ。今ではそういうことを言う人はあまりいないだろうけどね。
- ・そんな別に意識はないです。アイヌはアイヌだけど。
- ・うん、ずっとそういう意識は持っていますね。小さい頃からだね。儀式とかあったし、まわりでも言葉、うちの母くらいになるとほとんどウタリ語をしやべらないのですけれど、その前の人たちはウタリ語を話していました。私は単語、簡単な言葉しか知らなかったね。
- ・そのうちに就職して出ちゃったから、その頃になるともうそういう儀式も少なくなって、おじいちゃんも結構歳になったから、まわりに儀式をする人もいなくなったね。
- ・年がら年中意識してます。(いつ意識するか) どのような時だとか言われても。自分の名前がもうあれだからね。〇〇って言うんだ。これでもう決まりでしょ。アイヌ。
- ・貧困な時だね、やっぱりね。貧乏だっちは、アイヌは幸せになれない。
- ・やっぱりずっとそういう生活をしてきてるしね、そしてやっぱり自分はアイヌの血を引いてると。そういう事が第一だと思うんですよ。あと、他の人は分かりませんが、それほど差別待遇された意識がないから。やっぱり、「アイヌなんだ」っていう事を言ってもですね、あまり差別待遇された事ないからね、やっぱり自分では意識して、誇りに思ってますよね。土台、この北海道自体はね、元々アイヌの島だったんだから。
- ・うん。内地で仕事してた時はね。うん。やっぱり少しは差別された。そう。言われるからね。
- ・あるよ。人にちょっと下げられた時に。

このようにアイヌの血筋と意識については、青年層がより少なく年齢層が高くなるにつれアイヌであることの意識を強く持っている者が多かった。

新ひだかの場合も、青年層は意識する者が少なく、老年層は意識する者が多いことがわかっている。また新ひだかの調査では、老年層において自分のルーツを詳しく説明できる者が多かった。しかし本調査においては、老年層であってもルーツについての話を詳しく伝えるという話は聞かれなかった。

第3節 次世代への意識

第1項 結婚

アイヌの血筋であることが、結婚の際に影響したのだろうか。

まず青年層から確認していこう。青年層の既婚者の話の中で、結婚の際にアイヌであるという民族性を考慮したことのある人は見られなかった。「ない」「とくにない」「何もない」という言葉に表れるように、アイヌの血筋を引いているということを結婚の際に意識した者はほとんどないといえる。ただし、民族性をまったく考えていなかったかといえそうではない。民族性の考慮は「まったくない」と言いながらも、「気にする人って、そういう話になると、何かよくわからない面倒くさい話をしてくるから、気になるんだったら、お前帰れとなるのですよね」と、そもそも民族性を気にするような人とは結婚を考えないため、「ない」としているものの、「何かよくわからない面倒くさい話…」という言葉に表れているように、人によってはアイヌであることを気にする場合もあることを認識しているといえる。

- ・（結婚の際、民族性を考慮したことは）何もないです。
- ・まったくないですね。そうですね。気にする人って、そういう話になると、何かよくわからない面倒くさい話をしてくるから、気になるんだったら、お前帰れとなるのですよね。
- ・ああ、ないです、ないです。（配偶者の家族を含め）知らないっしょ、多分。〇〇（県名）の人は。
- ・（民族性の考慮）無いですね。
- ・とくに無いです。
- ・ないです。

壮年層はどうであろうか。壮年層は青年層のように「まったくない」「気にしない」とは多少様相が異なる。「自分自身は気にしない」「ない」と言いながらも、「周りではある」「周りの人が反対した（自分たちの結婚に）」「直接は聞かないが（相手の両親が嫌がっている）」など、自分自身が直接的に経験したことはないものの、アイヌの血筋であることが結婚に何らかの影響を及ぼしたとする者が青年層よりも多い。

だが一方で、「そんなの気にはしないし」「反対するのがちょっと（考えられない）」「何も言われなかった」「聞かなかった」「知らなかった」のように、知らなかったし、知っていても気にはしなかったという者の方が多数である。それは結婚を予定している相手がアイヌの血筋であることを知らなかったという者も同様であり、アイヌの血筋であることを知ってもとくに何も驚いた様子がない例が多かった。

- ・（夫がアイヌの血筋であることは知らずに結婚した）私も別にそんなの気にはしないし。漁師仲間でもいっぱいいるしさ。
- ・だから、そういうことで（アイヌであることに）反対するのがちょっと、私は考えられないんだけどね。犬とか猫と結婚するわけじゃないんだから（笑）。
- ・私はすぐ言った。「私そうだよ、父親がそうだよ」って。「だから半分だよ」って言うことは言ったよ。（中略）「私はそうなんだよ。それが嫌だったら別にいいよ」みたいな事は言った。
- ・別に何も言われたことないし。聞かれても、別に相手もそんな悪いことも言わないし。
- ・普通に仲がいい友達もいたんですけど、普通の和人というかね。結婚する時に、やっぱり私がアイヌだということで、その人本人ではなく、周りの人が反対したというのもあります。
- ・（配偶者がアイヌであることを説明）されなかったんですけど、彫りが深かったり、毛がちよっと濃かったりとかという感じで、何となくそうかなとは思っていたんですけど、こっちからも聞きもしなかったし、向こうからも特別言わなかったんですけど。
- ・まったく考えてなかったっていうか、全然知らなかったから。その叔父さんに言われるまで。「へ？ それってなに？」って思ったんだけど。
- ・結婚したあとですね。こっちに来てから。おじいちゃんが教えてくれたんですよ。「お前はアイヌよりアイヌらしいな」、毛深いのをみて、「よその者には見えないな」って話しをしていて、「アイヌなんだよ」って教えてもらったんですよ。そうなんですかって感じで、別に。
- ・私はアイヌじゃない人と一緒になって、うちの人は受け入れてくれたから今一緒になって何十年も経っているけれど。（中略）何十年も一緒にいるんだけど、別に毛があっても俺はかまわないという感じで私を受け入れてくれて。その結果子ども2人が生まれて、結局は毛深い子どもが2人。私の血をやっぱり引いてしまうのね（泣）。
- ・いや、なかったですね。（相手のご両親が嫌がっている）直接は聞いたことはないけれど、昔の話ですが、妻の母親が室蘭に住んでいて、「いやだ」と言っていた話を聞いたことがありますね。私には言いませんでしたけれど。
- ・ないですね。親反対する人たまにいますけど（反対されなかった）。親は夫の実家と行き来があったんで。親戚とか。付き合いがあった。そっかそっかみたいな感じで。
- ・（自分自身は）ないです。周りでそういうのあります。あれだから絶対だめだって。

老年層では自分がアイヌであることを知らなかったとする者は少なく、知っていたが周囲や自分自身が気にしなかったとする者、自分自身は気にしなかったが周囲に反対、あるいは心配されたという者が多い。それには時代的な背景があるようだ。「親父は子どもの頃だいぶいじめられた」「アイヌの娘は途中で投げられる（捨てられる）」「（子どもが）いじめにあうでしょ」とアイヌであることの差別が現在よりも多かった時代だったため、アイヌの血筋か否かは今よりも重い現実であり、

それが結婚に影響することも多かったため、事実を伝えることが一般的だったといえよう。

- ・無い…。ただね、自分の父親、おやじは子どもの頃だいじめられたという話は聞いてたし、息子たちにも1回、「なんで親父と一緒にになったんだ」っていう事も問われた事もあるんですけどね。
- ・私自身はないけど、主人もないんじゃないかな？ただ結婚したいと言った時、父はもういなく、おじが代わりに挨拶に言った時に「アイヌの娘だけれどいいのか」と主人が聞かれて、「いや、いいです」と答えていました。アイヌの娘は途中で投げられる（捨てられる）からと。世代は変わってきているけれど、おじの時代はそういう人が周りに多かったの聞いていましたね。
- ・そんなこと考えたことなかった。そんなことは気にしないで、ほら行け、ほら行け、ほらもらえ、ほらもらえて、どっちも言われて。おやじの兄妹もいっぱいいたからね。
- ・うん…これはあるわな。やっぱり、ねえ。子どもが生まれた場合。結局そういうような、うん。いじめにあうでしょ？差別、いじめ。それがやっぱり気になるところだね。
- ・無いね（笑）。自然と一緒にになったんでないですか？
- ・なんもない。俺はだよ。嫁の親は片親だったけど、父親が漁師をやっていて手伝ってもらったりしていたよ。うん、そういう問題はなかったな。
- ・意識はあったけど、そんなに気にしなかった、その時はちっとも。アイヌも同じなんだから、別に気にするなと。（中略）…わかってはいたんだけど、そんなに深く関心はとめてなかったからね。
- ・全然、何も言われませんでしたよ。（相手に）今でも離婚して亡くなってても、お母様とはお付き合いしてます。
- ・前から分かっていました。言いましたから。「おれはウタリだからね」って言われたら。私の母親はやっぱり面白くなかったみたいですけど。
- ・そうそう、かえってアイヌの方が情が深いって。（中略）…そりゃ、もう親ずっと言ってました。アイヌの方が情があるって、親たちに勧められて。

新ひだか調査では結婚の際にアイヌであることに由来したエピソードがあった。とくにアイヌの血筋を薄くするため、あえて和人と結婚したとする者も散見された。しかし本調査ではアイヌの血筋を意識し意図的に和人と結婚するなどの例は見られなかった。

さらに前回の調査において離別の経験を持つ者の多さがあった。本調査においても離別の経験を持つ者は少なくなく、それは年齢層があがるほどに多くなっていた²⁾。

第2項 子どもへの告知

結婚については、青年層の「気にしていない」から多少気にしているまで幅があった。ではアイヌ民族であるということは、次の世代には伝えるつもりなのだろうか³⁾。

アイヌの血を引くものであることを子どもに伝えるか否かについて見てみよう。

青年層では、子どもへの告知について明確に伝えると答えた者は1名だけで、他は子どもに「聞かれたら」「伝える機会があったら」「興味を持ったら」伝えるというものである。青年層は親である自身もアイヌ民族である意識をはっきりと持ちえていない者が多く、そのことが次の世代に伝えるということにも影響していることがわかる。

- ・（自分の子どもには）たぶん伝えないんじゃないですか。（理由は）とくにないですね。自分が意識してないから。
- ・とくにないですね。たぶんそのまんま、私たちが見てたように子どもたちも見て、サラッと。別にこう、かしこまって教えてもらおうとかっていうわけじゃなくて、そういうお祭りがあったら行って、そういう民族衣装を見たりとか、そういうのはあるのかもしれないけど。私自身もとくにそういうのを分かってないので、かしこまってこう伝えるっていう事はないと思うんですね。これから先も。
- ・言ったことは無いんじゃない。言っていないですね。（子どもへの告知）どうだろう。聞かれたら答えるぐらいかな。
- ・たぶん小学校とか中学校になったら、本人がそういうのに興味を持つと思うので、聞かれたらひいひい爺ちゃんが、というぐらいですかね。
- ・いや、伝えると思います。いつだろうね（笑）。やっぱりお墓参りが一番…。いいんじゃないかな。

壮年層はどうだろうか。壮年層で多く目につくのは、アイヌであることを知っていても「薄い」「ちょっと入っている」などアイヌの血筋であるが、純粹のアイヌと比較して薄いことを強調するような発言である。アイヌの血を引くわが子が、他の子どもの事を「アイヌじゃないのか」と話していたため、自分たちもアイヌの血筋であることを伝えたという例もある。

現実としてアイヌの血筋が薄まっているという事実は、血筋の濃さばかりでなく意識の薄さにもつながっているようにも思える。しかしそれは一方で「薄い」ことがアイヌであることを伝えることのハードルを下げているようにも見える。

さらに、アイヌの各種の資金もアイヌであることを伝えやすくしているものの一つである。アイヌの血筋を引いているからこそ、それらの資金を受ける資格を持つのであり、それを「活用する」「援助を受けられる」「制度を利用できる」のである。

そこだけ捉えると、アイヌであることで差別的な経験よりも、むしろ資金を利用できることで、プラスの影響があるのだと、そのメリットの部分を強調しながらアイヌであることを伝えるという者が多かった。

一方でアイヌ民族の伝統文化等を次世代に伝えたいという趣旨での告知は壮年層では見られなかった。

- ・だから、活用するっていうかさ、ウタリのね。そういう子どものさ、そういうのもしね、私たちが学校時代にそうやってあれしてくるんであれば、私も入るかなという話もしてんだ、一番上の娘も子どもいるから。したら、そういうふうになったら、もう〇〇さん通して話して、あれすれぱいいんだって、話はしてんだ。私たちもお世話になったから、このウタリのあれに入って、家も建てたし、ウタリのやつで家も建てたし。
- ・やっぱり言われたように、薄いけど入ってるよというか。お兄ちゃんは、毛深いからというわけじゃないけど、結構、毛深いんですよ。
- ・(子どもに伝えるつもりは) いや、とくにないかな。とくにないんだけど、うちの親とかもそんなにアイヌの血が、ほとんど薄いみたいな感じで言われていたんで、とくに告知とかする気はないかなみたいなの。
- ・程度というか、だいたいがそういうのにこだわらないから、多少は入っているというのは自覚していると思うので。(中略) あとはわからないもの、私。おばあちゃんの代から少しは入っているんですよみたいな程度しか。気にしないしね。
- ・小学校高学年ですね。たまたま友達というか、私の友達もそうなんですけれど、結構顔の濃いのがいるので、そういうので「アイヌじゃないか」というあれで、「いや、おまえたちもだよ」というので。
- ・とくに子どもたちもアイヌの血筋を引いているからどうのこうのという考えはないみたいです。
- ・一応「おじいちゃんがそうだった」という話をして、「お父さんがハーフなら子どもたちはクォーターだね」なんて言うぐらいで。なのでとくに子どもたちもアイヌの血筋を引いているからどうのこうのという考えはないみたいです。「えっ、クォーター？」とかと言って笑っている感じです。
- ・なんとなくじゃないですか？ 皆さん。皆さんって言ったらおかしいけど。子どもが、うん…と思います。思いますっていうか、お祖父ちゃんがそうだったからじゃないかなと思うけど。(中略) 本人(配偶者)もあんまりそういう儀式とか？ そういうのがあまりわかってないと思うんですよ。はい。ただ、そのウタリ協会の資金をいただいて2人の息子を援助してもらって、少しは助かった、助かったって言ったらおかしいんだけど、高校もちゃんと行けたし、上の子は上のそういう、利用させていただいて上の学校に行けた事なので、そこら辺は上の子はわかっていると思うんですよ。下の子は下の子で私立行ったから、そういうのでこれだけお金がかかってるっていう事を本人も、下の子もそういう私立ではそういうお金かかるから行かれなっていう。だから「父親がアイヌだからこうやって援助がもらえるんだよ」という事を言ってます。
- ・小学校だね。いや、中学校かな。きっかけはねえ、なんだろうねえ。学校で勉強するようになったのかな。アイヌのことを。
- ・上の子は聞いてくるから、普通に喋ってます。昨日も喋ったけど。アイヌってどういうあれなのとか、和人ってどういうあれなのって。でも下の子は何も聞いてこないからそのままですね。(中略) …聞いてくることに対しては答えるけど、っていうのが。
- ・はっきり言ってますけど。息子が高校卒業して進学する時に、うちはこういう家庭だからこういう制度を利用して学校に行くことができるんだっていう話をして、その時にうちはアイヌの家庭だから、お父さんの方のおばあちゃんおじいちゃんっていうのはアイヌなんだよっていう話をしたら、すごいびっくりした顔してて。「知らなかった？」って言ったら、当然何て言うんだろう、大人の感覚で言うとなんかもうさだし、親戚のおじいちゃんおばあちゃんもそうだから、なんとなくわかってるんだろうと思っていたら、全然感じてなかったらしくて、びっくりして「そういうこと知る機会がなかった」って言っていました。

老年層はどうか。老年層でもアイヌであることは伝えているものの、その伝え方は意図を持って伝えるというよりも、何かの契機や子どもに尋ねられたことで「お前だってアイヌの子」「アイヌの血入っているよ」というような伝え方をしている者が多い。それはアイヌ民族であることについて次の世代に伝えるという意味での告知よりも、たんに事実を伝えているにすぎないように見える。一方で、この年代では、少数ではあるものの、アイヌであることに誇りを持つような言葉や、文化を伝えていくという意図を持ち子どもに伝えた者も見られた。

「5年生か6年生には、(子どもたちは) 自分がアイヌだってわかりました。私の方から言わなく

ても、自分たちから、俺たちアイヌだよなって、子どもたちの方から質問されました。抵抗なく、アイヌはアイヌだからいいしょって。なんもお前たち、和人に悪いことしてるわけじゃない。自分は自分でアイヌだからって、いばってアイヌになるように教えました。」

「たとえば刺繍とかね、木彫りとか。そういうものがあって、これがアイヌの伝統的な文化なんだったという事は教えていますけどね。この辺でね、アイヌの文化なんかを教えるったら、本当に微々たるもんなんだよね。一番手っ取り早いのはカムイノミとかイチャルパとか、そういうのなので、教えていくより他ないんです。」

このようにアイヌであることに誇りを持つような言葉がけや、意識してアイヌ文化を伝えるというような発言も少数ではあるが確認された。

- ・うん、言った事はあるような気はするけど。何のきっかけかは忘れたけど（笑）。
- ・うん、程度とか、そんなんじゃないくて「アイヌの血が入ってるよ」というだけで、それ以上の事は（言っていない）。今こら辺、そんなに差別とか無い、もっと昔はあったんだろうけど。
- ・うーん。やっぱり学校で、毛深いから…。長男は、「なんで一緒にあったんだ」っちゅうような事を。「誰それさん、アイヌだってね」と言うから、「お前もあいのこだべや」という話はね、いい加減に高校生あたりになったらね（していた）。うん。
- ・それは一切（アイヌだということを伝えたことが無い）。ただ、子どもたち同士でアイヌとかスベタとか言うから、「お前だってアイヌの子だべや」というような話はしたけども、一切おやじがアイヌだからどうのこうのっていう事は一切、そういう事は一切言わない。（中略）…うん。うん。いえば、アイヌっていうよりは「あいのこ」だよっていう事は（言った）ね。おやじがアイヌで私がシャモだから、「あいのこだよ」という事ね。
- ・子どもたちが中学の頃かな、夏休みに本家に行った時、2人に「お母さん、僕たちアイヌ人なの？」って聞かれたんですよ。「そうだよ、お母さんはアイヌの血を引いている」と言ったら「ふ〜ん」と言って、2人とも全然気にしていないみたいです。全然違和感はないみたいです。中学生の時です。支給を受けた時ですね。その時に言っていましたね。でも全然そういうのに対してはまったく思っていないみたいです。
- ・伝えているということよりも分かっているから、何も言うことはないと思っているからこっちから何も言わない。
- ・いやー、強制的に、「そうすれこうすれ」という事は言いたくないから。自然に、自分でやりたければやれば良いと。「こういう文化があるんだよ」というのだけは教えてありますよ。そう、そう。たとえば刺繍とかね、木彫りとか。そういうものがあって、これがアイヌの伝統的な文化なんだったという事は教えていますけどね。この辺でね、アイヌの文化なんかを教えるったら、本当に微々たるもんなんだよね。一番手っ取り早いのはカムイノミとかイチャルパとか、そういうのなので、教えていくより他ないんです。
- ・うん、分かっているよ。ばあちゃんがいた時から、幼稚園の時から言っていたから。
- ・そうそう、違うというのは分かっている。少しは体毛があるから、いやがりますよ。でもこればかりはどうにもならないから。
- ・中学生、高校生の時は知らせてなかったんですけども、高校生になってから（家庭の様子を見て）分かったと思います。（直接は）言っていないけど。（中略）「アイヌの血は入ってるんだよ」というのはチラッとは言った事あると思いますけど、事細かに丁寧に説明はしてませんね。
- ・「そういうあれがあるよ」（アイヌの血筋）ということです。「だから、そういう人のことをばかにしたりしたら駄目だよ」ということをね。何ともないですね。
- ・小学校中はちょっとかわいそうだから、中学校入った頃教えてるよ。
- ・血、入ってるよって。ばあさんがそうだから。（中略）…なんも。クロッとしてたよ。俺らがアイヌって覚えた時とかクロッとしてたよ。子どもたちになったらほとんど友達もみなもう混ざってるから、自分がアイヌだって分かるのなんかなんぼもない。それは、あんまり早く教えてしまえば卑屈になったら困るなと思って。自分もたまにあったから、子どもにそんなことさせたらかわいそうだ。あれだけクロッとしてるなら最初から教えておくべきだった。
- ・結構ね、子どもたちは早く覚えちゃった。5年生か6年生には、自分がアイヌだってわかりました。私の方から言わなくても、自分たちから、俺たちアイヌだよなって、子どもたちの方から質問されました。抵抗なく、アイヌはアイヌだからいいしょって。なんもお前たち、和人に悪いことしてるわけじゃない。自分は自分でアイヌだからって、いばってアイヌになるように教えました。今のこいらの子どもって、アイヌをアイヌって軽蔑しないよ。たいてい、アイヌだから和人だからって、そういう見分けはないと思う。かえて今、子どもたちだって、アイヌで悪いのかって、こんなやり方だからね。たいして苦にしていらないみたい、今の子どもたちは。私がたが見てる範囲ではね。

結婚や子どもへの告知を見ると、2節のアイヌの血筋や意識と同様に、青年層では低く、老年層では高いという傾向が見られた。つまり青年層では結婚や子育ての中でアイヌであることを意識する者が少なく、老年層ではアイヌであることを意識するような経験をしていた。そのような傾向は新ひだかの調査でも同じような結果であった。

だが今回の伊達調査では、新ひだかの調査と比較してどの年齢層もアイヌであることを意識する

ことが少なかった。とくに壮年層、老年層ではその傾向が強く、新ひだかでは結婚の際にアイヌであることを意識するような経験を持つ者が多かったのに比べ、伊達では壮年層でもアイヌであることが問題にならなかったとする者が多数であった。

おわりに

本章ではアイヌの血筋について確認するとともに、その血筋をどのように受けとめているのか、次の世代に対してどのように考えているのかについて見てきた。

伊達市に居住するアイヌの人々の血筋は、胆振というアイヌの人々が古くから居住している地域にありながら、これまで調査したどの地域よりも混血が進んでいた。また意識についてもアイヌであることを意識する発言は年齢層が低くなるのにもなって減少しており、新ひだか調査と比較して全体に少ない印象があった。

たとえば、新ひだか調査では、子どもに対してアイヌの血筋であることに由来する心配が多かった。とくに毛深いという身体的な特徴について、危惧する発言が多く聞かれた。本調査でもそれらの身体的な特徴「ホリの深さ」や「毛深さ」などを悲観する発言も聞かれたが、全体としてみれば少数であった。むしろ本人さえアイヌだと気がつかないほどの程度であり、アイヌの血筋ではあるが、「ほんの少し入っている」、いわば「軽い」という意味の発言が目立った。そのため子どもへの告知も深刻なものとして伝える者は少なく、また受けとめる子どもの側も、アイヌの血筋であることを重く受けとめる者は見られなかった。

実際に青年層では自分がアイヌであることを意識する機会が、日常的に少なく、結婚の際でさえもほとんどなかった。また壮年層でもその傾向は同様であり、アイヌの血筋であることを意識することは少ないといえる。

青年層や壮年層のそのような結果は、今後に大きな影響を及ぼすだろう。なぜならその次の世代は、それ以上にアイヌであることを意識しなくなる可能性が大きいからである。これまでの調査においても、アイヌの人々がその血を薄くするために意識して和人と結婚するという発言があった。だが本調査ではそのような例もほとんど見られなかった。つまりアイヌであることが、プラスの意味でも、マイナスの意味でも目立っておらず、ごく自然にある。それは古くからアイヌ民族と和人が共に生活していたこの地域の特性かもしれないが、アイヌ民族の血筋や文化を継承するという面では難しい現状にあるといえるだろう。

注

- 1)有珠地区から西隣の虻田町に向かう山の中腹（善光寺の裏手・善光寺自然公園内）には、アイヌの人々が作ったチセやアイヌ慰霊碑があるが、教えられなければわからないような場所にひっそりとあるにすぎず、白老町のアイヌコタン、新ひだか町のシャクシャイン記念館のように、アイヌ文化の象徴的な場所とまではいえない。
- 2)アイヌの人々と結婚することに関する和人の意識については、本報告書第6章参照。
- 3)本報告書第7章においても、被差別経験と関連させて子どもへの血筋の告知について検討しているので参照されたい。

参考文献

小内透編著, 2013, 『調査と社会理論・研究報告書30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室.

(品川ひろみ)